

「森でおきている事」

作：ウィリアムズ雪乃・角南 有紀・佐生 実海



①森でおきている事



②ある日、リコという女の子が森にキャンプをしにきました。リコは森に来るのがいやでした。なぜかという、リコは虫がきらいだからです。

「うわぁ、虫がいっぱいて気持ち悪い！もう森なんてなくなっちゃえばいいのに。」



③暗くなってきたので、リコはテントに入ろうとしました。ところが、いきなり後ろがぴかっと光りはじめたのです！後ろをふりむくと、大きななにかがいました。



④「あなたは誰？」

とリコが言うと、その大きななにかは大きな声で答えました。

「おれはこの森に住む山猫だ。お前、昼間に何か言っていただろ。この葉っぱに乗れ、今、森でおきていることを見せてやる。」

山猫はそう言うと、リコを空飛ぶ葉っぱに乗せてくれました。



⑤「きゃー！虫ー！」

とリコは叫び出すと、山猫は少し困ったように言いました。

「おい、虫だってただそこらへんにいるわけじゃないんだ。虫は死んでから土に混じって、木の栄養になるんだ。ミミズなんかは土をほぐす役割をしている。」それを聞くと、リコは少し感心したように「そうなんだ…。」

と言いました。



⑥「ここはどこ？あの人たちは何をしているの？」とリコが聞くと、山猫はこう答えました。

「あれは砂漠化してしまった地域に木を植えるボランティアをしているんだ。」

そしてリコが

「なんだか楽しそうね！」

と言うと、山猫は

「そうさ。みんな森が好きだからな。」

と言いました。しかし…



⑦「これが何だか分かるか？」
と山猫がリコに聞きました。リコが
「ただの雨に見えるけど…」
と言うと、山猫は
「ただの雨じゃないんだ。」
と言いました。



「これは酸性雨と言って、排きガスが空気に混ざって雨がふると、森を枯らしたり、石を溶かしたり、湖を汚したり、たくさんの悪い事がおこるんだ。」
これを聞いてリコはゾッとしました。



⑧「森でおこっていること、少しはわかったか？」山猫が聞くとリコは
「うん、いいことも、悪いことも、少しわかった。」と答えました。
山猫は、どこからともなく木の苗を取り出して、言いました。
「もとの森に戻って、この木を植えよう。」
リコはにっこりほほえみました。



⑨山猫とリコは森に戻って、さようならを言いました。山猫は葉っぱに乗って、ぐんぐん空高くのぼって行きました。山猫が最後に見たリコの姿は、初めて会った時とはまったく違い、心からうれしそうな笑顔で手をふる姿でした。



⑩次の日の朝、リコはとても早く目ざめました。
テントの入り口からは光がさしこんでいます。リコは、きのうの出来事が全部夢だったのかと思い始めましたが、とりあえずテントの外に出ました。



⑪リコは外に出て、うれしさでいっぱいになりました。きれいなチョウチョを見たからでしょうか。いいえ、きのうの夜に山猫と一緒に植えた木を見たからです。

⑫リコは森が大好きになりました。虫が近づいてきても、へっちゃらです。山猫と植えた木は心なしに光っているように見えました。リコは、あの山猫を忘れる事はないだろう…と思いつつ、木を見つめるのでした。